本所回向院脇、通称寺裏通りにある菓子問屋近江屋が焼けたのは、師走も半ば、凍てついた北風の吹きすさぶ夜のことである。火元は近江屋の台所で、家人も使用人たちもとっくに寝静まり、火の気がないはずのところから唐突に燃え立った炎は、それが台所を舐め尽くし天井に達し、磨きこまれた樫の板張りの廊下に煙がもうもうと立ちこめるまで、誰にも気づかれることがなかったのが大きな災いだった。

近江屋の当主清兵衛のたったひとりの孫娘、新年を迎えれば十四歳になるお駒は、台所からは遠い、建屋の南側の瀟洒な庭に面した座敷に、母親のおつたと枕を並べて寝んでいた。生家を焼き尽くそうとする炎も煙も、彼女の夢のなかまでは忍び込んでこず、眠りは平和で深かった。

先に目を覚ましたのはおつたの方だった。遠くの方で、何か金気のものが打ち鳴らされる音を、夢うつつのなかで聞きつけたのである。彼女は寝床の上に跳ね起きた。

座敷のなかは静まり返り、冷えた夜気に満たされて、何の変わったこともないように

見えた。が、ひとつの商売屋を預かり切り回すお内儀として鍛え抜かれた彼女の勘は、この夜のなかで尋常ではないことが起こりつつあると報せていた。おつたは寝床から抜け出し、廊下と座敷を仕切っている唐紙を開けた。そこには、天女が気まぐれに袖をひらめかせたかのように、薄く淡く白い煙が帯になって漂っていた。

おつたは叫ぼうとした。だがその叫びより先に、台所の方からお島の悲鳴が聞こえてきた。女中頭はたまげるような声を繰り返し繰り返し張りあげながら、家中の者たちに火事を報せていた。

近江屋はさほど大きな構えの建物ではなかった。蔵は別として、店と住まいの方を合わせても、部屋数は十に足らない。廊下を駆け出すと、台所からあふれ出て廊下へ、住み込みの使用人たちの部屋へと舌をのばしてゆく炎の赤い色が、おつたの目に飛びこんできた。

「お島、お島、気をつけて！」

「お内儀さん、こっちへいらしちゃいけません！」

桶を構えて炎に立ち向かってゆく番頭の八助の横顔が、煙と熱気にまぎれてちらりと見えた。火の粉が顔に降りかかってくる。おつたは寝間着の袖で顔を覆い、なんとかお島たちを手伝おうとしたが、煙に咳こんでしまい、近づくことさえままならない。

――これはいけない。消し止められるもんじゃない。

思った次の瞬間に、おつたは身を翻して廊下を駆け戻った。座敷に戻ると、お駒が寝床の上に膝立ちになり、寝間着の襟元をしっかりとつかんで目を見張っていた。

「おっかさん――」

「起きなさい、火事だよ。逃げなくちゃ」

おつたはお駒に駆け寄ると、夜着の上に広げて伏せておいた綿入れの半纏を着せかけた。

「廊下はもう危ないから、お庭へ出なさい。庭を回って、おじいちゃんのお部屋の縁側へ上って、おじいちゃんを呼びなさい。一緒に、南側の廊下を通ってお店の方から外へ出るんだよ、いいね」

当主の清兵衛は六十五歳、商いのさばきなどはまだかくしゃくとしているが、いささか耳が遠くなっている。まだ起きてはいるまい。幸い、清兵衛の寝間は台所からいちばん遠い建屋の南端にある。お駒とふたりで逃げれば心配はあるまい。

「おっかさんは？」と、お駒が母親の袖をつかんだ。「いっしょに逃げようよ」

「あたしもすぐに追いかけるから」おつたはお駒の手を握り、微笑みを浮かべた。「いくつか、持って出なくちゃならないものがある。だけどすぐだから。すぐに逃げるよ」

あれは、寺裏通りの入口に立っている火の見櫓だろう、擦半鐘が聞こえる。おつたは雨戸を開け、お駒の小さな背中を庭の方へと押しやった。

「さあ行きなさい、早く！」

お駒は素足で庭に降りた。沓脱石の上の庭下駄を履こうとして、昼間も夜もどんよりと曇り、風ばかり吹いて寒い日だったのに、満月に照らされてでもいるかのように庭が明るく、下駄がはっきり見えることに気がついた。振り仰ぐと、二階の北側の連子窓から炎が吹き出していた。炎は夜空に向かって踊りあがり、勝ち誇るように赤い指を広げていた。

半鐘はけたたましく、庭のぐるりの檜の塀の向こう側から、近所の人々のわめき騒ぐ声も聞こえてくる。お駒は走って庭を横切り、清兵衛の寝間の縁側によじ上った。

「おじいちゃん、開けて」

雨戸を両手一杯叩き、大声で呼んだ。すると雨戸はすぐに開いた。開けたのは住み込みの女中のおしゅうだった。清兵衛を助けに来たらしい。

「お嬢さん、ああよかった。早くこっちに」

おしゅうの声に、座敷の清兵衛が振り返った。床の間の隣の違い棚の物入れのなかから、綴じた書き付けや紐をかけた小箱を取り出して、両腕に抱えている。

「お駒、早く逃げなさい。おっかさんはどうした」

「荷物を持ってすぐに来るって」

「荷物なんてものは……」自身も両手に書き付けなどを抱えながら、清兵衛は怒ったよ

うに短く吐き捨てた。「放っておけばいいんだ」
「あたし、見てきます」
おしゅうが廊下に飛び出し、煙が、と大きな声をあげた。
「旦那さま、お嬢さん、早くお店の方に！　早くしないと、こっちの廊下にも煙がいっぱい！」
おしゅうが咳こみながら、煙のなかを泳ぐように、おつたとお駒の部屋へ引き返してゆく。とっさにお駒を庭へ回らせたおつたの判断は正しかったようだった。
「おつた……」廊下に立ちこめる濃い煙の幕を呆然と眺めながら、清兵衛ががっくりと言った。「おつたは……」
それから、はっとしたように身じろぎした。
「そうだ、堪忍箱が！」
お駒はその言葉をちゃんと聞き損ねた。かんにん――何だって？
「おじいちゃん、なあに、なんのこと？」
清兵衛は身をかがめ、お駒と視線をあわせると、両手に抱えた書き付けなどを――それは古い大福帳の写しであるようだった――手渡した。
「これを持って逃げておくれ。店の方へ――」

この続きは、書籍でお楽しみください。
◎注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。